

【6】原始仏教聖典に記されたルート①——南道と北道——

原始仏教聖典には「南道 (P.: *dakkhiṇāpatha*, Skt.: *dakṣiṇāpatha*) 」と「北道 (P., Skt.: *uttarāpatha*) 」という言葉が見られる。これは具体的なルートをさすかもしれないので検討する。

[1] ‘*dakkhiṇāpatha*’ と ‘*uttarāpatha*’

資料を紹介し、検討する前に確認しておかなければならないことがある。

まず第1は、‘*dakkhiṇāpatha*’ ‘*uttarāpatha*’ は常に単数形で用いられ、複数形で用いられることはないということである。問題を先取りしていえば、「南道」「北道」の最大の問題は、これが具体的な「道路」をいうのか、あるいは漠然とした「地域」をいうのかということである。もし具体的な「道路」をいうのなら、単数で用いられるということは特定の1つのいわば固有名詞としての道路をいうのであって、「南にあるいくつもの道路」「北にある複数の道路」をいうのではないということである。もちろんこれが「地域」という意味なら単数で当然である。

第2は、‘*dakkhiṇāpatha*’ ‘*uttarāpatha*’ があるのなら「中央道」すなわち ‘*maj-jhimāpatha*’ という用語があってもおかしくないが、しかしながらこのような用語は存在しないということである。今のところこれが何を意味するかわからないが、事前に紹介しておいた方がよいであろう。

そして第3は、「南道」「北道」は ‘*dakkhiṇāpatha*’ ‘*uttarāpatha*’ と方角を表わす部分に長母音が用いられ、‘*dakkhiṇapatha*’ ‘*uttarapatha*’ とは表わされないということである。すなわちこの言葉はなぜ単純に「南」「北」を意味する ‘*dakṣiṇā*’ ‘*uttara*’ と「道」を意味する ‘*patha*’ が合わさった複合名詞ではないのかということである。

[1-1] 次に紹介するのは、研究会会員である岩井昌悟氏の意見である。

uttarā と *dakṣiṇā* の語尾の ‘-ā’ は Böhtlingk と Monier は具格の古形の格語尾であるとする。このことは Macdonell の *Vedic Grammar* (p. 256) でも確認できる。すなわち男性と中性の単数・具格である。

しかしパーニニ (Pāṇini) は 5.3.36 のストロアでこの ‘-ā’ を、*purastāt* (前方に) や *adhastāt* (下に) の ‘-astāt’ と同様の機能をもつ *taddhita* 接尾辞であるという。‘-astāt’ は方角、地点、時が話題になっている時に、処格・奪格・主格として機能する。‘-ā’ はただし、処格 (*dakṣiṇā vasati* 南に住む) と主格 (*dakṣiṇā ramaṇīyaṃ* 南は好ましい) として用いることができても、奪格としては使えないと規定されている (「南から来た」を *dakṣiṇā āgataḥ* とは言えず、この場合は *dakṣiṇata āgataḥ* としなければならない) 。

たとい Vedic の具格の格語尾の形であるとはいっても、この -ā はすでに具格としては機能していないということになると思われる。

そして複合語の前分となった時にどう理解すべきかという問題が残るが、恐らく処格でとるべきだと考えられる。

dakṣiṇāpatha は原意は「南における道」、あるいは処格は移動の目標・到達点を示すこともできるから「南への道」となると考えられる。

ただしこれを *bahuvrihi* で解釈すれば「南における道を有する地域」「南への道を有する地域」という意味に解釈することもできる。

以上のように '*dakṣiṇāpatha*' は文法的には「南における道」「南への道」、'*uttarāpatha*' は「北における道」「北への道」という意味になる。もちろんこれは '*patha*' を字義通りの「道」と訳した場合である。また「南における道を有する地域」「南への道を有する地域」あるいは「北における道を有する地域」「北への道を有する地域」という意味にもなりうるということになる。

[1-2] なお次項以降においてデータを紹介するが、註釈書文献では例えば '*dakṣiṇa-janapadan ti dakṣiṇāpatho ti pākāṣaṃ Gaṅgāya dakṣiṇato janapadaṃ.*' すなわち「南の国土とは南道のことであって、いわゆる Ganga 河の南の国土である」とされている (DN. A. vol. I p.265)。要するに '*patha*' は「道」ではなく「地域」「国土」を意味する '*janapada*' とされているわけである。

このように '*dakṣiṇāpatha*' '*uttarāpatha*' の語形そのものに問題があるのであるが⁽¹⁾、これについてはここでは深入りしないで、先に進みたい。

- (1) ちなみに '*dakṣiṇāpatha*' '*uttarāpatha*' という言葉は、PTS の *Pāli-English Dictionary* にも水野弘元『パーリ語辞典』にも採取されていない。これも不思議といえば不思議である。

[2] '*dakṣiṇāpatha*' と '*uttarāpatha*' の使用例

以下に原始仏教聖典と後期の原始仏教文献に用いられている '*dakṣiṇāpatha*' '*uttarāpatha*' の使用例を紹介する。後に議論する際の便宜を考えて、データには〈 〉のなかに番号を付す。「原始仏教聖典」(われわれのいう A 文献)には〈100〉番台、「後期の原始仏教文献」(われわれのいう B 文献)のうちアッタカターや仏伝経典には〈200〉番台、さらに遅くに成立した複註文献には〈300〉番台をつける。

なお本稿では漢訳聖典も使っているが、漢語として「南道」や「南方」などが用いられていても、その原語が上記のようなパーリ語・サンスクリット語であると確認されないケースは取り上げていない⁽¹⁾。したがって漢訳文献はそれに対応するパーリ文献やサンスクリット文献の直後に置いてある。その他ただ 1 例であるが「達睹那国」としてその原語が '*dakṣiṇāpatha*' であると推測されるデータを含めた。なおここでは原語 '*dakṣiṇāpatha*' '*uttarāpatha*' の訳語にはとりあえずすべて「南道」「北道」という言葉を使っておく。

- (1) 本稿の【2】「原始仏教聖典に記された通商・遊行ルートの『基礎データ』」では、「南道」あるいは「北道」の後に‘*dakkhiṇāpatha*’ ‘*uttarāpatha*’を補っているものがある。しかしこれはこのように推定できるという範囲で使っているものであるため、本節では厳密を期してこのようなものは採用していない。

[2-1] 原始仏教聖典 (A 文献) に見られる「*dakkhiṇāpatha* (南道)」と「*uttarāpatha* (北道)」データ

- 〈101〉 *Udāna* 005-006 (p.057) : そのとき**アヴァンティ南道** (*Avantidakkhiṇāpatha*) には比丘が少なかった。
 *PTS テキストには ‘*Avantisudakkhiṇāpatha*’ とされているが、註の D をとって ‘*Avantidakkhiṇāpatha*’ を採用した。
- 〈102〉 *Suttanipāta* 005-001 (p.190) : パーヴァリン婆羅門がコーサラの美しい都 (舎衛城) から**南道**にやって来た (*Kosalānaṃ purā rammā, agamā dakkhiṇāpatham*) 。
- 〈103〉 『パーリ律』 「皮革韃度」 (vol. I p.194) : そのとき**アヴァンティ南道**には比丘が少なかった (*tena kho pana samayena Avanti-dakkhiṇāpatho appabhikkhuko hoti.*) 。
- 〈104〉 『パーリ律』 「羯磨韃度」 (vol. II p.015) : そのときスダンマ長老はマツチカーサンダ (*Macchikāsaṇḍa*) のチッタ居士の住処にいた。チッタ居士がスダンマ長老に「尊者よ、昔、**南道**の商人たちが東方の地方へ交易のために行って (*dakkhiṇāpathakā vāṇijā puratthimaṃ janapadaṃ agamaṃsu vaṇijjāya*) 雌鶏を持ち帰った」と語った。
- 〈105〉 『五分律』 「羯磨法」 (大正 22 p.163 中) : 「昔、商人が**北方**より 1 羽の雌鶏を持って波婆国 (*Pāvā*) に来て、雄鶏がないので、鳥と共合して卵を生んだ……」。
- 〈106〉 『十誦律』 「般茶盧伽法」 (大正 23 p.224 中) : 「**北方**に估客衆があつて雌をもつて東方に来て鳥が共合して子を生んだ」。
- 〈107〉 『パーリ律』 「波羅夷 001」 (vol. III p.001) : 世尊はヴェーランジャーのナレール・プチマンダ樹下に 500 人の比丘たちと共に住された。…そのとき**北道**の馬商人たち (*uttarāpathakā assavāṇijā*) が 500 頭からなる馬をつれてヴェーランジャー (*Verañjā*) で雨期に入った。
- 〈108〉 『梵文僧祇律』 (p.179) : 世尊はヴァイシャーリーに住された (*Bhagavān Vaiśāliyaṃ viharati*) 。そのとき商人が 1 万の価格のガチョウ模様の織物を携えて南道からやって来た (*aparo dāni vāṇijako dakṣiṇa-pathāto āgato, daśa-sahasra-mūlyam haṃsa-lakṣaṇa-ṇaṇa-ṇaṇa ādāya*) 。
- 〈109〉 『僧祇律』 「(比丘尼) 捨墮 020」 (大正 22 p.526 下) : 仏は毘舍離に住された。その時**南方**に商人があつて、細鵝の相紋の氈を持ち来るに、人が問うて言った。「此の衣は幾許を索めるのか」と。答えて言った。「百千なり」と。
- 〈110〉 『梵文根本有部律』 「皮革事」 (p.172) : ある三衣比丘が南道からシュラーヴァステーに到着し、世尊に挨拶した (*anyatamo bhikṣus tricīvarako dakṣiṇāpathāt Śrāvastim anuprāpto Bhagavataḥ pādābhivandakaḥ*) 。
- 〈111〉 『根本有部律』 「皮革事」 (大正 23 p.1054 上) : 時に**南方**に一苾芻あつて、身に但だ三衣を着て室羅筏城に至り、世尊に頂礼した。

- 〈112〉『梵文僧祇律』(p.178) : 世尊はヴァイシャーリーに住された。そのとき商人が1万の価格のカンバラ宝珠を携えて北道からやって来た (Bhagavān Vaiśāliyaṃ viharati, aparo dāni vāṇijako śatasahasra-mūlyam kambala-ratanam ādāya uttarā pathāto āgato) 。
- 〈113〉『僧祇律』「(比丘尼)捨墮019」(大正22 p.526中) : 仏は毘舍離に住された。その時**北方**に商人あって貴品の好欽婆羅を持して行き、これを売った」
- 〈114〉『梵文根本有部律』「薬事」(p.025) : 北道から隊商主が500頭の馬に貨物を載せてヴァイランブヤに到ると、彼は考えた (yāvad uttarāpathāt sārthavāhaḥ paṃcāśvaśatāni paṇyam ādāya Vairambhyam anuprāptaḥ sa saṃlakṣayati) 。
- 〈115〉『根本有部律』「薬事」(大正24 p.045上) : 世尊は勇軍聚落 (Śūrasena 国) において人間を遊行し鞞闍底 (Vairambhya) 城に至って練木樹の下に住された。時に商主あって**北方**より来り、五百匹馬を将いて此の城中に至った。
- 〈116〉『十誦律』「七百比丘集滅惡法品」(大正23 p.451上) : 長老三菩伽は是の事を聞き已って、即ち使を**達嚩那国阿槃提国**や諸国に派遣して、「汝らは知らないか、毘耶離国に十事が出たことを」と言わせた。その時**達嚩那国阿槃提国**等の諸比丘は即ち皆な毘耶離に集会した。

[2-2] 後期原始仏教聖典 (B 文献) に見られる「dakkhiṇāpatha (南道)」と「uttarā-patha (北道)」データ

- 〈201〉DN. A. (vol. I p.265) : ‘dakkhiṇa-janapada’ とは、**dakkhiṇāpatha** として知られ、Ganga [河] 以南の janapada のことである (dakkhiṇa-janapadan ti dakkhiṇā-patho ti pākaṭam Gaṅgāya dakkhiṇato janapadam) 。
- * PTS の脚注 8 のビルマ版を採用し、pākaṭa-janapadam の pākaṭa を削除して読む。
- 〈202〉SN. A. (vol. III p.092) に SN.41-3 (vol. IV p.288) の「Isidatta がアヴァンティ国から来た」というなかの ‘Avantiyā’ を解説して、「‘Avantiyā’ とは、**南道**のアヴァンティ国に、である (Avantiyā ti dakkhiṇāpathe Avanti-raṭṭhe) 。
- * ただし PTS 版は ‘Avantiyā ti Avanti-dakkhiṇā-pathe Avanti-tito’ としている。
- 〈203〉Jātaka-A. 423 ‘Indriya-j.’ (vol. III p.463) : カーラデーヴァラという仙人が**アヴァンティ南道**において、ひとかたまりの岩山の近くに、数千の仙人に圍繞されて住していた (Kāḷadevalo nāma isi Avanti-dakkhiṇāpathe ekagghana-selaṃ nissāya aneka-sahassa-isi-parivāro vasi) 。
- 〈204〉Jātaka-A. 522 ‘Sarabhaṅga-j.’ (vol. V p.133) : (菩薩は) 第四番目には、カーラデーヴィラに「カーラデーヴィラよ、そなたは**南道のアヴァンティ国**にガナセーラという名の山がある。その近くに住むように」と送り出した (catutthavāre kāḷadevilaṃ āmantetvā "kāḷadevila, tvam dakkhiṇāpathe Avanti-raṭṭhe Ghana-sela-pabbato nāma atthi, taṃ upanissāya vasāhī" ti pesesi) 。
- 〈205〉Petavatthu-A. (p.133) : アンクラ [王子] は**南道**に行つて、ドラヴィダ地方⁽¹⁾の海の近くにたくさんの布施堂を建て… (Aṅkuro dakkhiṇāpatham gantvā Damīla-visaye samuddassa avidūraṭṭhāne mahatiyo aneka-dānasālāyo kārāpetvā…) 。
- 〈206〉Samantapāsādikā (vol. I p.176) : 「(パーリ律の「北道の馬商人 (uttarā-

pathakā assa-vāṇijā)」の箇所を註釈するなかで、**uttarāpathaka**とは**北道**の住人たち、あるいは**北道**からやって来た人たち (**uttarāpathavāsikā uttarāpathato vā āgatattā**)とし、同じ文脈に「彼らは**南道**の人たちのように不信仰ではなく、彼らは信を持ち、有信で、ブツダを信奉し、法を信奉し、サンガを信奉する (**na hi te dakkhiṇāpathamanussā viya appasannā te pana saddhā pasannā buddhamāmakā dhammamāmakā saṅghamāmakā**)」。

- 〈207〉 *Theragāthā-A.* (vol. II p.083) : (アンガニカ・バーラドゥヴァーージャ比丘は) クル国のクンディヤという町の近郊にある阿蘭若に住していて、ある用事でウツガ園に行き、**北道**からやって来たかれら知人の婆羅門たちと会合し…… (**Kururaṭṭhe Kuṇḍiyassa nāma nigamassa avidūre aranne vasanto kenacideva karaṇiyena Uggārāmaṃ gato uttarāpathato āgatehi sandiṭṭhehi brāhmaṇehi samāgato tehi**)
- 〈208〉 *Jātaka-A. 005 'Taṇḍulanāli-j.'* (vol. I p.123) : 昔、カーシ国のバーラーナシーに (**Kāsiraṭṭhe Bārāṇasiyaṃ**) ブラフマダッタ王がいた。……そのとき**北道**から一人の馬商人が500頭の馬を引き連れて来た (**tasmim kāle uttarāpathato eko assavāṇijo pañca assasatāni ānesi**) 。
- 〈209〉 *Jātaka-A. 158 'Suhanu-j.'* (vol. II p.030) : 昔、バーラーナシーでブラフマダッタが統治していた。ときに**北道**の馬商人たちが五百頭の馬を引き連れてきた (**atha uttarāpathakā assavāṇijā pañca assasatāni ānesuṃ, assānaṃ āgatabhāvaṃ rañño ārocesuṃ**)
- 〈210〉 *Jātaka-A. 254 'Kuṇḍakakucchisindhava-j.'* (vol. II p.286) : 昔、バーラーナシーでブラフマダッタが統治していたとき、菩薩が**北道**の馬商人の家に生まれた (**atīte Bārāṇasiyaṃ Brahmaḍatte rajjaṃ kārente Bodhisatto uttarāpathe assavāṇijakule nibbatti**)。…あるとき菩薩も500頭の馬を連れて、その家 (=バーラーナシーへ向かう道中のある老婆の家) で宿を借りた (**athāparabhāge Bodhisatto pañca assasatāni ādāya āgacchanto tasmim gehe nivāsaṃ gaṇhi**) 。
- 〈211〉 *Jātaka-A. 454 'Ghata-j.'* (vol. IV p.079) : 昔、**北道**のカンサボーガのアシタンジャナ市に、マハーカンサと名づける王が統治していた (**atīte uttarapathe Kaṃsabhoge Asitañjana-nagare Mahākamsa nāma rājā rajjaṃ kāresi**) 。
- 〈212〉 *Petavatthu-A.* (p.100) : 舎衛城在住の商人たちが500台の車に品物を積んで、**北道**へ行って (**Sāvattvivāsino vāṇijā pañcamattāni sakaṭasatāni bhaṇḍassa pūretvā uttarāpathaṃ gantvā**) ……。
- 〈213〉 *Petavatthu-A.* (p.111) : **北道**のカンサボーガのアシタンジャナ市のウツラマルダー地区の領主にしてマハーサーガラ王の息子ウパサーガラと、マハーカンサの娘デーヴァガッパには、アンジャナデーヴィーという娘一人と (**Uttaramadhurādhipatino rañño Mahāsāgarassa puttāṃ Upasāgaraṃ paṭicca uttarāpathe Kaṃsabhoge Asitañjana-nagare Mahākamsassa dhītuyā Devagabbhāya kucchiyaṃ uppannā Añjanadevī**) 。
- 〈214〉 *Mahāvastu* (vol. II p.030, 『平岡』上 p.281) : 「**南道**のウツジェーニーに、婆羅門の青年がいて、婆羅門の大資産家の子であった (**dakṣiṇāpathe**

brāhmaṇa-kumāro Ujjeniyam brāhmaṇa-mahāsālasya putro) 。 [後に聖仙アシタと
なって、菩薩の将来を占う]

〈215〉 『仏本行集経』 (大正 03 p.693 下) : 南天竺の地に城があつて名は優禪禪耶尼と
いった。城から遠からざるところに頻陀と名づける山があつてその中間にさらに一山
があり名を阿私陀といった。この時仙人が彼の山におり、その山に仙人がいて名を阿
私陀といった。

〈216〉 *Mahāvastu* (vol.III p.258, 『平岡』下 p.361) : ヤショーダラーは「子 (ラーフラ)
よ、 [そなたの父はカピラヴァストゥを去って] 南道に行った」と答えた
(Yaśodharā āha, putra dakṣiṇāpatham gataḥ) 。ラーフラは「母よ、何のために
南道へ行ったのか」と質問した (Rāhula āha, ambe kenārthena dakṣiṇāpatham
gataḥ) 。ヤショーダラーは「交易に行った」と答えた (Yaśodharā āha, vāṇijyena
gato) 。

*このときヤショーダラーは嘘をついたことになっている。したがって南道はマガダ国方面をいっ
たものではないであろう。

〈217〉 *Mahāvastu* (vol.III p.350, 『平岡』下 p.431) : コーシャラ王は一人でお伴もなく、
知られざる格好で南道に行った (eka advitiyo ajñāta-veśena dakṣiṇāpatham
gacchati) 。

〈218〉 *Mahāvastu* (vol.III p.350, 『平岡』下 p.431) : そのとき彼 (隊商主) はコーシャ
ラ王に望みを託し、次第に南道よりコーシャラ王の境界に至った (so dāni taṃ
Kośala-rājam āśāṃ kṛtvā dakṣiṇāpathāto anupūrveṇa Kośala-rājño viṣayam
anuprāptaḥ) 。

〈219〉 *Mahāvastu* (vol.III p.351, 『平岡』下 p.431) : 私の王国 (コーシャラ) はカーシ
王に蹂躪され、身体のみで南道に赴いて (rājyaṃ Kāśirājñā ākrāntaṃ
śarīra-mātreṇa dakṣiṇāpatham prayāto) ……。

〈220〉 *Mahāvastu* (vol.III p.361, 『平岡』下 p.440) : カンピッラ城 (Kāmpilla nagara)
のブラフマダッタ王の百人の王子に弓術を教えようと、南道からの弓術師が
(dakṣiṇāpathāto iṣvastrācāryo) カンピッラにやって来た。

〈221〉 *Mahāvastu* (vol.III p.363, 『平岡』下 p.441) : 彼 [聖仙シャラバンガ] は [ヴェー
ラーナシーの北にあるヒマラヤ山麓から] 南道へ行き、アスマカ国領のゴダーヴァ
リー河 (so dakṣiṇāpatha-gato, Asmakeṣu Godāvarī nadi) のその岸辺にカピッタカ
という住処を用意して過ごした (tasyā kūle Kapitthakaṃ nāma āśramaṃ sādhetvā
prativasati) 。

〈222〉 *Mahāvastu* (vol.III p.363, 『平岡』下 p.441) : 彼 [聖仙ヴェアツツア] はヒマラヤ
山麓の寒さに耐えられず、南道のゴヴァルダナという市に行った (so
anuhimavante śītam asahanto dakṣiṇāpatham gato Govardhanaṃ nāma nagaram) 。

〈223〉 *Mahāvastu* (vol.III p.390, 『平岡』下 p.460) : ある婆羅門が南道からマトウラー
にやって来て (dakṣiṇāpathāto Mathurām āgato) 、銅器を脇に巻き、大きな松明を
燃やしてマトウラーに入る (mahantīm ulkāṃ prajvāletvā Mathurām praviśati) 。

南道から [マトウラーに] やって来る婆羅門は論争者で、ヴェーダに精通している

(dakṣiṇāpathāto brāhmaṇo āgato vādī veda-pārago)。7日後、ある出家女が南道から [マトゥラーに] やって来た婆羅門と討論するだろう (saptamaṃ divasaṃ amukāye parivrājikāye dakṣiṇāpathikena brāhmaṇena vādinā sārddhaṃ kathā-saṃlāpaṃ bhaviṣyati)。

- 〈224〉『仏本行集経』(大正03 p.831下)：諸の外道を見めるであろう、共に論議し、折伏せんと欲するが故であり。而して漸漸に行きて最妙と名づける一波梨婆闍道人に値い自在に他に勝ち、処々に遊歴して南天竺より来りて北天に往くであろう。
- 〈225〉*Mahāvastu* (vol.III p.394、『平岡』下 p.462)：そこで彼ら [婆羅門と出家女] はマトゥラーを出立して、南道の諸地域を遊行し (te dāni Mathurāyā nirgamyā dakṣiṇāpathe janapada-cārikāṃ caramāṇā)、9ヵ月、10ヵ月経過後にシュヴェータヴァラーカーに至った (navānāṃ vā daśānāṃ vā māsānāṃ atyayena Śvetavalākāṃ anuprāptā)。
- 〈226〉『仏本行集経』(大正03 p.832上)：時彼波梨婆闍道人。離心既決。与彼女人一金指環。用以為記。復告女言。汝若生女。用此指環。貨易取財。持以養育。若生男者。汝当与此指環為記。令尋覓我。付指環已。捨彼女去。偕面還向南天竺行。
- 〈227〉*Mahāvastu* (vol.II p.166、『平岡』上 p.391)：昔、いにしえの道である北道にはタクシャシラーという名の都市があり、そこにヴァジュラセーナという名前の隊商の子が馬の交易で、商品の馬を引き連れて、タクシャシラーからヴァーラーナシーにやって来た (bhūtapūrvam bhikṣavo 'tītam-adhvāne uttarāpathe Takṣaśilā nāma nagaram tatra Vajraseno nāma śreṣṭhiputro aśva-vāṇijyena Takṣaśilāto Vārāṇasim gacchati aśva-panyam ādāya)。
- 〈228〉*Mahāvastu* (vol.II p.175、『平岡』上 p.398)：あるときタクシャシラーの俳優たちがヴァーラーナシーにやって来た (kadācid dāni Takṣaśilakā naṭā Vārāṇasim āgatāḥ)。…(長者が)「君たちはどこから来たのか (kuto yūyam)」と質問すると、彼ら(俳優の男児)は「僕たちは北道から (uttarāpathakā vayam)」と答えた。
- 〈229〉*Divyāvadāna* (p.022)：北道より隊商主が商品を携えてヴァーラーナシーに到着した (uttarāpathāt sārthavāhaḥ paṇyam ādāya Vārāṇasim anuprāptaḥ)。
- 〈230〉*Divyāvadāna* (p.315)：かつて過去世において、北道にバドラシラーという名の城、王都があった (atīte 'dhvany uttarāpathe Bhadrāśilā nāma nagarī rājadhāny abhūvan)。
- 〈231〉*Divyāvadāna* (p.353)：ある隊商主が北道より商品を載せた500匹の馬を引き連れてマトゥラーに到着した (anyataraś ca sārthavāha uttarāpathāt pañcaśatam aśvapanyam gṛhītvā Mathurām anuprāptaḥ)。
- 〈232〉*Divyāvadāna* (p.407)：アショーカ王に対して北道の都市タクシャシラーが反乱を起こした (rājño Aśokasyuttarāpathe Takṣaśilā nagaram viruddham)。…この事態にアショーカ王が自ら出向こうとしたが、大臣たちの進言を受けてクナラ王子を派遣することになった。王子はパータリプトラから出て行った (Pāṭaliputrān nirgataḥ)。…次第に王子はタクシャシラーに到着した (anupūrveṇa Takṣaśilām anuprāptaḥ)。
- 〈233〉『阿育王経』(大正50 p.144下)：於北有国名徳叉尸羅拒逆不従阿育王令。

[2-3] パーリ複註文献

- 〈301〉 *Salāyatanavagga-ṭikā* (MYANMAR vol. II p.371) (SN.041-003 (vol. IV p.285) の復註) : ‘アヴァンティに’ というのは、アヴァンティ国に、であり、またそれは中国より南の方角に (*majjhima-padesato dakkhiṇa-disāyaṃ*) あるので ‘南道において (*dakkhiṇāpathe*) ’ とされる。
- 〈302〉 *Sāratthadīpanī-ṭikā* (MYANMAR 版 vol. I p.427) = 波羅夷罪第1条のヴェーランジャーでの雨安居の部分のアッタカターの註釈で、北道の馬商人 (*uttarāpathakā assa-vāṇijā*) の語釈に関連して：ガンガーより南方は不適切な地域 (*Gaṅgāya dakkhiṇā disā apatirūpa-deso*)、北方は適切な地域 (*uttarā disā patirūpa-deso*) という意味で、「彼らは南道人のように不信心でなく…」と言われるガンガーの南岸に生まれた人が南道人である。
- 〈303〉 *Vimativinodanī-ṭikā* (MYANMAR 版 vol. I p.089) : ガンガーより北方の地域が北道であり、そこに住む人 (*Gaṅgāya uttaradisā-padeso uttarāpatho, so nivāso etesaṃ*)、あるいはそこから来た人が北道人である (*tato vā āgatā ti uttarāpathakā*)。』かれら(馬商人)の居住地が北道
- 〈304〉 *Sāratthadīpanī-ṭikā* (MYANMAR 版 vol. I p.427) : 北道から来た (*uttarāpathato āgatā*) 人、あるいは北道に住む人が (*uttarāpatho vā nivāso*) 北道人である、と。
- 〈305〉 *Sāratthadīpanī-ṭikā* (MYANMAR 版 vol. I p.427) : ‘北道人 (*uttarāpathaka*) は他の言い方では北道人 (*uttarāhakā*) とも言われる。
- 〈306〉 *Silakkhandhavagga-abhinavaṭṭikā* (MYANMAR vol.2 p.292) : 一人の王の領土になっているカーシ・コーサラ等は大国土と呼ばれ、一人の王の領土の中の1つ1つの区画が北道・南道等の小国土である (*ekassa rañño rajje ekeka-koṭṭhāsa-bhūtā uttarāpatha-dakkhiṇāpathādi-khuddakajanapadā*) 。

[3] ‘*dakkhiṇāpatha*’ と ‘*uttarāpatha*’ が意味するもの

以上が ‘*dakkhiṇāpatha*’ ‘*uttarāpatha*’ とこの漢訳語と考えられるデータである。読んでいただければわかるように、この中にはさまざまな情報が含まれていて、これが具体的な「道路」をいうのか、あるいは漠然とした「地域」をいうのか容易には判断できない。要するにどちらの解釈が正しいか確言できるようなデータは存しない。

そこで状況証拠として、これらのうちのどちらかをさすのではないかと考えられる材料をあげてみる。

[3-1] まずは ‘*dakkhiṇāpatha*’ が「南の地域」「南の国土」、‘*uttarāpatha*’ が「北の地域」「北の国土」を意味するのではないかと理解できるようなデータを紹介する。

「地域」と解すべき材料の第1は、‘*dakkhiṇāpatha*’ や ‘*uttarāpatha*’ が漢訳文献において南方あるいは北方と翻訳されたり = 〈109〉 〈111〉 〈113〉 〈115〉、あるいは南天竺と翻訳されたり = 〈215〉 〈224〉 〈226〉 するデータがあることである。これらは少なくとも

も漢訳者たちはこの語が具体的な道ではなく、ぼんやりした地域を表わすと理解していた証拠である。なお〈105〉〈106〉はパーリが‘dakkhiṇāpatha’であるにもかかわらず、漢訳では「北方」と訳されているが、これもこの1つの証拠としてあげておいてよいであろう。

「地域」と解すべき材料の第2は、‘dakkhiṇāpatha’が註釈書において「南の国土(dakkhiṇa-janapada)」と解説されたり＝〈201〉、また‘uttarāpatha’が「Ganga河の北の方角」＝〈201〉〈302〉〈303〉、‘dakkhiṇāpatha’が「中国よりも南の方角」＝〈301〉〈302〉と解説されたりすることである。これらも「南道」「北道」が具体的な道ではなく、ぼんやりと南の地域、北の地域を表わすという証拠である。

またきちんと理論づけすることはできず、感覚的にいうにすぎないが、〈102〉〈104〉〈107〉〈108〉〈110〉〈112〉〈114〉〈206〉〈207〉〈208〉〈209〉〈210〉〈212〉〈217〉〈218〉〈219〉〈220〉〈223〉〈225〉〈229〉〈231〉〈233〉〈304〉〈305〉〈306〉などは「具体的な道」というよりは、ぼんやりした地域を表わすと見た方がわかりやすい。これに対して具体的な「道路」と解した方がわかりやすいという用例はない。

[3-2] これに対して、‘dakkhiṇāpatha’ ‘uttarāpatha’がぼんやりした地域ではなく、具体的な「道路」、いわば**固有名詞**としての「南道」「北道」を表わすと解釈できる材料もある。

その証拠の第1は、まず何といてもこれらの原語が‘patha’ということばで表わされていることである。‘patha’は「道」という意味であって、岩井氏がいうように bahuvrīhi で解釈しない限り「地域」「国土」を意味するものではないからである。だからこれは本来は具体的な道路を意味するものでなければならない。

「道路」と解すべき証拠の第2は、‘Avantidakkhiṇāpatha’という熟語化された固有名詞がある＝〈116〉〈203〉ことである——〈306〉によればこの語は Avanti 国の中の一区画として捉えることができることになるが、他に例がない特殊情報として今は無視した——。そのほか、「南道の Avanti 国」＝〈202〉〈204〉、「南道の Ujjeni」＝〈214〉、「南道のアスマカ国領の Godhāvāri 河」＝〈221〉、「南道のゴーヴァルダナという市」＝〈222〉、「北道の Takkasilā」＝〈227〉〈228〉〈232〉、「北道のカンサボーガのアシタンジャナ市」＝〈211〉〈213〉、「北道のバドラシラーという名の王都」＝〈230〉、「北道のウツカラ」＝〈233〉などとするデータがあり、このほかにも「南道において」というのは「ドラヴィダ地方において」とする＝〈205〉データがあり、これらは具体的な「南道」沿いにあった国あるいは都市を意味すると解釈した方がよいかもしれない。しかしながら実は、‘Avantidakkhiṇāpatha’ 以外は、インドの「南方地域にある国・都市」「北方地方にある国・都市」という意味であると解釈することもできる。

「道路」と解すべき証拠の第3は反証(disproof)的なものであるが、南道・北道が南の地域、北の地域だとするとなぜ‘majjhimāpatha’という術語がないかということである。「南部地方」「北部地方」があれば、当然「中部地方」もなければならないと考えられる。しかしこれが南北を結んでずっとつながる1本の道であるとすれば、これをどこかの地点で二分割して「南道」「北道」としても不自然ではない。

[3-3] 以上のようにデータから‘dakkhiṇāpatha’ ‘uttarāpatha’を、「地域」と理解することも、具体的な「道路」と理解することも可能である。しかし「道路」と理解すべき

材料としてあげたものは「地域」と理解してもそう不自然ではないから、どちらかといえばこれらを「南の地域」「北の地域」と理解する方に分がありそうである。

[4] ‘dakkhiṇāpatha’ と ‘uttarāpatha’ が示す地域

それではもし ‘dakkhiṇāpatha’ や ‘uttarāpatha’ が「南の地域」あるいは「北の地域」を意味するとすれば、これらは具体的にはどのような地域をイメージしているのでしょうか。

そのイメージを助けてくれるのが前項において「道路」として理解すべき証拠としてあげた地名である。すなわち、

南の地域にあった国名・地名＝Avanti 国、Ujjeni、Godhāvari 河、ドラヴィダ地方

北の地域にあった国名・地名＝Takkasilā、バドラシラー、ウッカラ、カンサボーガのアシタンジャナ市

であって、これからすると「南の地域」はデカン高原部をイメージすることは明らかである。これに対して「北の地域」はその所在がわからない地名が多いけれども、「北の地域」のイメージは Takkasilā に代表されるといってよいであろう。すなわちインドの西北部、現在のパキスタン地方であって、「北の地方」が「馬」と密接に関連していることによってもわかる。すなわちデータの〈107〉〈115〉〈206〉〈208〉〈209〉〈210〉〈227〉〈231〉がこれを表わしている。

馬は遊牧民と密接な関連を有し、農耕が中心であった Ganga 河流域地方では馬は家畜としてそれほど重要ではなかった。そこで原始仏教聖典においても交通手段としての馬はほとんど現われない。要するに馬は地理上遊牧が中心とならざるをえなかった草原地帯の、現在のパキスタンやアフガニスタン、すなわち中央アジア寄りのインド西北部でこそ重要な家畜であり、そこで北の地方の商人たちは馬そのものを商ったり、輸送手段として馬を使ったりしたのである。

このように ‘dakkhiṇāpatha’ はデカン高原部、‘uttarāpatha’ はインド西北部をイメージしていた。これは次節において考察するように「仏教中国」に対する「辺国」にあたり、この辺国の南の地域が ‘dakkhiṇajanapada’ であり、北の地域が ‘uttarajanapada’ である。そしてこの「南の地域」と「北の地域」は1本の幹線道路で結ばれていたから、前者は ‘dakkhiṇāpatha’ と呼ばれ、後者は ‘uttarāpatha’ と呼ばれるようになったのではないであろうか。そしてデカン高原部を代表する国がアヴァンティであり、インド西北部を代表する都市が Takkasilā であって、この南のアヴァンティ＝Ujjeni と北の Takkasilā を結ぶ一本の幹線道路があった。そこで「南道アヴァンティ」や「北道タッカシラー」という熟語も生まれたのであろう。もちろんこの道は南は Ujjeni を越えて Godhāvari 河やもっと南のドラヴィダの土地まで延びており、北西は Takkasilā を越えて今の Peshawar やアフガニスタンまでつながっていたであろう。

この道はおそらく南の半分は Godhāvari 河の河畔を出発したバーヴァリン (Bāvarin) の弟子たちが釈尊に会いにいった道と重なり、西北の部分は Takkasilā に留学した若かりし時の医師ジーヴァカ (Jivaka) のたどった道と重なる。

この道はもちろん中央部分は「中国」すなわち‘majjhimanapada’を通過しているのがあるが、この部分は道路網が張り巡らされていたから、1本の「道路」で表わすことはできず、そこで‘majjhīpatha’という用語は存在しえなかったのであろう。

以上のような理解からすれば、‘dakkhiṇāpatha’ ‘uttarāpatha’ はもともと「南の地域に通じる道」「北の地域に通じる道」を意味したが、同時に bahuvrīhi 的用法として「南の地域に通じる道を有する地域」「北の地域に通じる道を有する地域」を意味し、ここから「南の地域」「北の地域」そのものを意味するようにも用いられたと解釈するのが妥当であろう。

【6】 原始仏教聖典に記されたルート①—南道と北道—